

上京當時をしのびて

今井 邦子

女流文學者のなかでも私は特に微禄時代をすごした一人と思ひます。と申しますのは私の家では私の女文士になる事など大反對で嚴格な父親はどうしても許してくれませんでしたから、仕方なしに私は家をぬけ出して無一文といふ程度で單身上京してしまつたのでした。今思へば私も亦何といふ世間しらずだつたでせう、持ちものと言つては詩集を五六冊大切さうに紫メリンスのふろしきに包んで、あとは着がへ一枚も持たず、櫛さへも持たずにたゞ空想を追つて茫然と上京したのです。でも私は少しも都會を恐れてゐませんでした。それどころか山深い信濃を出ていくつものトンネルを越えて八王子からだんだんと廣い武蔵野の平野にかゝつた頃には思はず一人汽車の窓に倚つて嬉し涙を流しました。

いく山を越えて來りぬ美しき都の夜にまづ涙わく

私はまづ河井先生（醉茗氏）のお玄關にとび入りそこで二ヶ月程御厄介になりました。それから同じやうに文學を志して上京した生田花世さんと御一緒に一文もお金などなくせにどうするつもりであつたか下宿にうつりました。花世さんは時々月末のお拂をどうしようかと考へこんではごはんの箸も上げ得ぬ事がありました。一體私は今考へても不思議な程呑氣で平氣でごはんもすゝみ英語の勉強に通うたりしました。田舎者の私は、そして世間しらずの我儘娘で不自由な思ひをそれまでした事がなくて成長しましたから私は世を恐れる氣持は少しもなく金を憂ふる氣持もありませんでしたが、今思へば羨しい程の心境で大膽で明るいのでした。

その月の拂は先生がたの御厚意で原稿料の前借同様にして無事に拂ふ事が出來ましたがそれは十一圓なにかしの金高でした。

それから生田さんはやつと職がみつかつて王子の學校へ勤める事になりそちらへ行かれるし私は水野仙子さんと代々木初臺の二軒長屋の一軒に入つて自炊生活をする事になつて下宿を引拂ひました。

此生活が同様貧乏で……それに私は地方官であつた父母の手元を離れて三才の時から山國の祖母の手元に育てられてゐた身でしたから、成長して親と一緒になりまして互の間がごく冷淡で親しみとはありませんでしたから、私が親の許さぬ文學者を志して家を出てしまつた事を非常に立腹して昔でいふ勘當同様になつてゐましたから着がへはおろかふとんもお金はもとより送つてもらふ事が出來ませんでした。それで下宿では貸ふとんを借りてゐましたが、仙子さんと一緒

の時は仙子さんのふとんを包んであつた赤毛布あかもうふを借りてそれを敷きふとんに代へそれも仙子さんのかいまきを一枚かりてそれで夜のものを間に合せて居りました。私が家を出たのは一月でした。が初臺に行つたのは四月中頃でそろ／＼暖い頃でしたからよかつたやうなものゝ、此度は裕あはせがなく、今まで着てゐた綿入の着物の綿をぬいて大いそぎで裕をつくつて着ましたけれど外に出るには洋傘かさがほしい時候になつて私は全く當惑とうわくしました。そしてその時はじめて氣がついてみると世間の人はよかれあしかれ洋傘をさしてゐるのですが、立派な人が立派な洋傘をさしてゐるのはあたりまへの事として、一見まづしさうな人でも洋傘を持たない人はまあないのを知つて私は全く感心して、どういふお金のはいつた時洋傘が買へたのかと首をひねりました。さうしてみるとお召めしや銘仙の美しい着物をふだん着にして、さうかせぎもなささうな若い娘が歩いて行くのを見ても不思議で／＼この人々はどうしてこんな着物が買へたらうとつくづく感心したものでした。

仙子さんの少しの時へもすつかりすんでしまつた頃の或る日、私はあてのない借金に町へ出てゆきましたが、もとより今日程こんにちほども知人を持たなかつたその頃の私は一錢のお金を借りる處もありません。無駄歩きをして勞つかれて歸つてくると、不思議や自分の家の軒のきをもらておいしさうな肉の煮えるにほひが漂うてくるのです。もうその三四日は、二人は出来るだけ用心して三度三度お香のものだけでごはんを食べてゐた時なのです。

「只今ただいま」

私は力なく格子戸をあけて入口の六疊に腰をおろしました。仙子さんは前かけで手を拭きながら臺處から出て来て、

「だめだつたでせう」

と念を押してから、

「さあね、どんな事があつても手をつけまいと思つたお金を、今日は少し持つて来たから、これでやれるだけやりませう……今日は豚を買つておいたから……。」

さう言ふ仙子さんを私は姉の如く思ひました。私が中央新聞の婦人記者に職を得たのはそれから半月程たつてからの事で、その日までの困りやうは今も身に沁みて居りますが私はそれだからとて少しも心が曇りませんでした。然しよくよく物を案ずればそれも亦一つにはその時代の反映で、世が世なら……即ち現代のやうな時勢なれば私も必ずいろいろの刺戟を受けてもつと貧者といふ事を根本的に考へさせられ、之を自分一個の問題としてだけでなく、社會と連絡してその向上法や解決の希望を持ち、さうした研究をする一人となつたかもしれませぬ。私はずゑぶん熱情家でしたから。

お茶の水土手の葛の葉ふきかへす朝宵あさよひの風秋づきにけり

邦子

入力者注…底本は総ルビでしたが、一部のルビだけを残しました。

底本…作品集「和琴抄」

むらさき出版部刊行 昭和十年六月六日 初版発行

昭和十年十月十日 第四版発行

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年七月十五日